

アメリカ1930年代における「文学戦争」 について (Ⅳ)

——第2回全米作家会議をめぐって——

樋口 秀雄

(1)

第2回全米作家会議は、1936年における優秀作品の1つとしてドス・パソスの『大資本』を選んだが、この小説の結末は人民戦線のたどる道を予告しているかのようであった¹。虐げられた者の側に立ち、とりわけサッコ・バンゼッティ処刑の不当性を鋭く批判している点では、政治的イデオロギーの枠を越えて読者の共感をよび、反権力の思想はいわゆるプロレタリア文学派の設定した必要条件を満たしているが、結果的には共産党に対する不信感をあからさまに表明しているからである。エドモンド・ウィルソンはドス・パソスへの手紙の中でこのことに言及し、サッコ・バンゼッティ処刑に対する糾弾の姿勢は、「ほんの建前としてのもの」ではなかったかという疑念さえ表明した²。誰がみても反共的とわかるこの作品が小説部門の最優秀作品に推された最大の理由は、反ファシズム戦線の地理的ならびに質的拡大にあったことは明白であって、戦術的利用価値としてのドス・パソスという印象は否めない。

プロレタリア文学理論そのものが破綻をきたしているわけでもないのに、何故早々に理論的後退をしなければならないのか、とこの会議における連盟の方針に強い不満を表明したのはフィリップ・ラーヴとウィリアム・フィリップスであったが、彼らがスタインベックの『20日ねずみと人間』を情緒的

もろさを持った作品であり、プロレタリア文学の必要条件を到底満たしているとは考え難いと批判したとき、『ニュー・マッセズ』の読者の1人はこれを人民戦線に対する真正面からの攻撃であるときめつけ、ベストセラーの可能性すらあるこの作品を高く評価するのがわれわれの義務であると反論した。これなども人民戦線のひとつの戦術的側面を示すものであると言えるであろう。ラーヴは、この種の議論は「アメリカ文学に蔓延している悪質かつ低級な文学水準」のあらわれであると反撃したが、その結果は、かえって共産党員批評家たちを激怒させてしまった³。しかし、彼らの共産党との決定的訣別はまだ先のことであり、党員批評家たちもここまでは比較的寛容な態度を示した。1938年、グランヴィル・ヒックスが『U・S・A』評の中でドス・パソスの共産党からの離反を激しく攻撃しながら、他方においてその芸術的価値に高い評価を与えたのも同じ意図があつてのことだと思われる⁴。ちなみに、ドス・パソスに対するあからさまの批判が始まったのは、スペイン共産党の行動を非難した『ある青年の冒険』(1939)からである。

終始一貫知識人に対する不信感を露骨に示したマイケル・ゴールドは依然としてその姿勢を崩さなかったが、それでも批判の対象をリベラル派知識人一般よりも、例えばシドニー・フックやシェイムズ・T・ファレルといったいわゆるトロッキスト派知識人に向け、「嫌悪と憎悪の感情を……世界の共産党に向けている」として彼らを非難するにとどめた⁵。

このようにして「文学戦争」はプロレタリア文学理論をめぐる闘いから、人民戦線を指導する共産党知識人対トロッキスト派知識人の激しい闘いに転ずることになった。

(2)

第1回全米作家会議の場合もそうであったが、この会議にもいわゆる基調報告というものはない。だが、この会議が人民戦線結成のための大きな役割を果たすものである以上、やはりアール・ブローダーの報告に先ず注目すべき

であろう。彼は知識人、とりわけ作家に対して、傍観者の立場を棄て民主主義擁護のための献身的兵士として立ち上るよう訴えた。「今日、反動、ファシズム及び戦争に反対する人民の側に立つ者にのみ文学の創造が可能であることは明白な事実である。象牙の塔はヒトラーやムッソリーニの爆弾によって徹底的に破壊されてしまった。……共産党は作家集団の中であって、特権的立場を求めるようなことはしない。……現代における最も偉大な文学は、広範かつ民主的統一戦線の発展という現実的過程を、人民の反ファシズム闘争のために芸術的に再構築することを扱っているものである。」⁶

共産党の作家会議への直接的介入を否定する見解は第1回会議の場合にもブローダーによって表明されているから、この報告がその時のプロレタリア文学運動のあり方に対する反省に基づくものであるとは断言出来ないが、政治の文学への不介入という言葉を文字通りに解釈することはあまりにも皮相的であるとする見方は、例えばヒックスやカウリーなどの回顧録にみられるものであって、一般にこの種の回顧録にはその後の自分の行動に照して、自己弁護や自己正当化の傾向が強いから、これもその儘信用するのは危険である⁷。しかし、歴史的視野に立ってみれば、この新しい歴史への視点は、「文学を政党の戦術に隷属させるという過去に犯した過ちの繰り返しから生まれたものである」とするアラン・カーマーの判断は⁸、本来人民戦線路線によるプロレタリア文学の衰退を慨嘆したものであるが、いずれにしても文学への党の方針の介入があったことを示している。

人民戦線路線はかつてはファシストとして痛烈に非難されたマクリシュや、政治的な無関心からほとんど無視されていたヘミングウェイの抱き込みに成功したが、その一方ではジョン・リード・クラブの以来の同志、フィリップ・ラーヴやジェイムズ・T・ファレルなどを陣営の外に追いやり、結果的には、反共的でいわゆるトロツキスト派の新しい『パーティザン・レビュー』の複刊につながる事になったことは衆知の通りである⁹。

広範な反ファシズム闘争の展開のためには、どうしても知識人の協力が必

要であり、いつまでも文学戦争にそのエネルギーを労費しているわけにはいかない。「昔の文学戦争は勿論のこと、比較的最近の文学戦争も遠い過去の遺物の感すらあった程である。芸術かプロパガンダか、詩か政治かといった問題にみられる対立感は、1937年の現実を眼の当りにする一般国民からは高踏的なものだと受け取られた」と述懐したのは、1935年の第1回会議の時にケネス・パークの「人民」文学への呼称変更に強く反対したジョセク・フリーマンであった¹⁰。

既にこの頃までには「モスコー裁判」の内実をめぐって知識の間に激しい動揺と対立がみられたが、スペイン戦争の勃発によって、進歩的文化人たちのソヴィエトに対する失望感や不信感は一時的に棚上げされ、判断の停止という好都合を生む結果となった。「単純明快なことだが、われわれは自分の立場が判断出来る程充分な情報をもっていない。意見の相違は相違として、国内の手近な問題に眼を向けるべきである。」¹¹「モスコー裁判」に関する情報不足は知識人のソヴィエトにおける言論の自由に対する不安と不信を一層強め、裁判の正当性を主張したマルカム・カウリーでさえ実際には「心臓がとまる思い」を経験したが¹²、第2回全米作家会議とスペイン戦争が同時的であったために、この会議が「スペインをたたえるお祭り」となったことは幸運であった¹³。

人民戦線の当面の目標は社会主義の実現にあるのではなく、この窮極目標に向っての地ならしをすることであり、その限りにおいては、「最適の条件創出のための闘いなくして、どうして社会主義のために闘っていると真面目に主張することが出来よう。」しかもこのプログラムの実現が「現体制の枠内で可能である」とするブローダーの公式見解は¹⁴、リベラル派知識人を念頭に入れてのものであり、アメリカ史再評価への導火線の役割を果すことになった。これはハロルド・スターン編『アメリカ合衆国の文明』(1922)および『現代のアメリカ』(1938)の両者の論調みも明らかなことであるが、後述のように、絶望から自信、反抗から許容度の増大への変化となって現わ

れ、いわゆる新しいアメリカニズムを形成することになる。この会議の各報告者の掲げたテーマ、例えばニュートン・アーヴィンの「アメリカ文学における民主主義の伝統」、グランヴィル・ヒックスの「アメリカの作家と未来」などにもこのことが強調されているが¹⁵、これらは何れもアメリカの「偉大なる伝統」と人民戦線の思想とは同一線上にあることを述べたものである。

(3)

1936年4月、『パーティザン・レビュー』のシンポジウム「アメリカニズムとは何か」は、主として左翼文学運動に属する多くの作家や批評家に対して行ったものであり、とりわけアメリカの伝統と革命精神との関連について彼らに回答を求めたものであった¹⁶。ニュートン・アーヴィンは、ドライサー、マッシュー・ジョセフソン、ジョセフ・フリーマンらと共に、マルクス主義とアメリカニズムの連続性を積極的に肯定したが、ロバート・ヘリックやウィリアム・カルロス・ウィリアムなどの意見と対立した。アーヴィンによると、アメリカ民主主義の源流はトム・ペインに始まる無階級社会実現の思想まで逆のぼることが出来、マルクス主義的社会主義の思想と一致するものであるが、この会議における彼の報告はこれを更に敷衍したものであった。

アーヴィンによると、アメリカ史がもっている社会・文化的意義は民主主義の大義にあり、これを18世紀以降の約3世紀にわたる文学史に照らしてみただけの場合、アメリカ民主主義の成熟深化の度合いが明らかになるというのである。彼はこの過程を二つの流れに分類し、ひとつはチャニング、エマソン、ソーローといった超絶主義者達の「平等あるいは兄弟愛よりも、むしろ自由の理念」を追求するものであり、もうひとつは、ロングフェロー、ローウェル、ホイットマン、ハウエルズ、マーク・トウェインなどのように「平等の理念」を掲げる流れであると指摘した¹⁷。マルカム・カウリーは、かつて、政治的覚醒が不十分なために、国外「亡命」という消極的手段によってしか政治的批判をなし得なかった自分自身への反省と知識人一般への警告を発し

たが、アメリカの革命的伝統とマルクス主義の理想とが同じ延長線上にある以上、民主主義を護るための反ファシズム闘争は、知識人に課せられた義務でさえあるとの結論に達したのは至極当然のことである。

この点からいって第2回全米作家会議の意義は、「視野が狭く、理論過剰であった」第1回会議に較べてより現実的であると言えるであろう¹⁸。仮りに、1930年以降をカウリーに従って「危機の7年」と呼ぶとするならば、この危機打開には、人民戦線の結成による知識人の、とりわけリベラル派知識人の大動員が最も有効な方法であるからである。

第1回大会の頃にはあれ程までブルジョワ的であるとか、反動的であるとか痛烈に攻撃されたアーチボルト・マクリシュがこの大会に招かれたのはこのひとつの現われであるが、彼の報告のテーマは「スペインとアメリカの作家達」であった¹⁹。文学の政治からの独立を頑なまでに主張して譲らなかったマクリシュに、スペイン戦争はファシズム対民主主義の闘争であって、原題が示す通り、これを「われわれの闘い」と言わしむる程この戦争は知識人達に大きな衝撃であったのである。そしてこれは、人民戦線の結成は新たな大戦への導火線になるという懸念や、いわゆるファシズム問題というのは、現実には、ファシズムと共産主義というふたつの全体主義の内紛に過ぎないとする考え方から、中立的立場をとる一部知識人への警告であった。例えばジョン・チェンパレンは、この戦争が「われわれの戦争」であるとする規定に異議を唱え、たとえこの戦争によってヨーロッパの民主主義が危機に陥いるようなことがあるとしても、そのこと自体アメリカの利害とは無関係であり、アメリカはあくまで中立的立場を貫くべきであるとし²⁰、作家会議への強い不信感を表明した。

又アルフレッド・ビンガムも、この戦争がファシズム対共産主義の闘いにまで発展している現状から、これを民主主義の危機ととらえることには無理があると説いた²¹。マクリシュの立場からすれば、これらには「戦争は既に……スペインで始まっている」という現実認識がないし、若しわれわれが立

場を明確にすれば、結局は何れかの側を利することとなり、気がついたら共産主義者のマヌーバーに利用されていることになる、という中立主義者の考え方は、アメリカの歴史的原理としての民主主義に対する「無責任な」傍観者の立場に過ぎない。ここに至って、マクリシュは政治と文学の不可分性を強調し、「許容と信念」を基盤とする「建設的文学の樹立」を訴えたのである²²。

『ニュー・マッセズ』への寄稿もほとんど無いに等しく、第1回会議においてもほとんど無視されていたヘミングウェイの参加は、この第2回作家会議を大きく盛り上げ、『ニュー・リパブリック』でさえ作家の組織力を称讃した程であった。記者としてのスペイン戦争従軍がその契機となったわけであるが、結果として、その頃次第に共産党批判を強めつつあったドス・パソスに代って、ヘミングウェイが党人気作家の座を占めることになったのである。これまでのドス・パソスの共産党批判はどちらかと言えば個人的で目立たないものであったが、元来理論より行動を重視する傾向のある彼にとっては、このスペインの経験は癒し難い「心の傷」であり、これが共産党との決別の大きな要因になったと思われる。ドス・パソスのスペイン訪門は過去3回、ヘミングウェイの場合には既に10数回におよび、両者のスペインへの愛着は相当なものであった。映画『スペインの大地』現地ロケの視点に関する両者の意見の衝突は、そのままスペイン戦争評価に関する見解の相違であり、会議へのヘミングウェイの参加、ドス・パソスの不参加は、人民戦線の実情を象徴的に表現しているように思われる。ドス・パソスが焦点を人民の堪え難き苦しみに置くべきであると主張したのに対して、ヘミングウェイは戦闘場面に置くべきだと主張して譲らなかった。前者が闘う労働者に感動しながらも、背後にある全体主義的マルクス主義と個人主義的アナキズムの激しい主導権争いを身をもって体験し、この様な状況の下では、たとえ人民軍が勝利しようとも、スペインの地方自治の伝統が崩壊するとの強い危機感を抱いたのに対して、後者はこれを「アメリカ自由主義特有の態度」として

批判し、人民軍に対するソヴィエト共産党の影響力をあまりにも過大視していると反論した²³。ドス・パソスは、人民軍の勝利は結局スペインの軍国主義化と中央集権化をもたらし、「この怖るべき程に有効かつ無慈悲な権力機構」が地方自治にとって代ることになると警告したのである²⁴。勿論共産党だけが批判の対象になったわけではない。たとえばジョン・デューイに対しては共産党は勿論、トロツキスト派との関係を断つよう忠告さえしているのである²⁵。

ヘミングウェイの共産党擁護はこの時限りのものであり、しかもこのことが原因となって両者の友情に亀裂が生じたことは、凡そ政治的イデオロギーに関心を示さないヘミングウェイがこの大会でもてはやされ、共産党に失望したドス・パソスが、実質はともかくとして、表面的には人民戦線にあってその宣伝効果の上から重視されていたことと共に誠に皮肉なことである。かってマルカム・カウリーがドス・パソスの小説には政治性がないと批判したとき、ヘミングウェイは、正義は集団や組織ではなく、性格の中にのみ存在するものであると主張して、この種の批判は的はずれであり、絶対に容認出来ないとさえ反論したことがあったが²⁶、この両者への戦線側の具体的対応の変化は、その戦術的效果に起因するものであることは明らかである。

正当な評価は必ずいつかは作家に与えられるものであることは言うまでもないことであるが、それはあくまでも作家が堪え得る体制内にある場合である。現実はどうかと言えば、堪え難い体制出現が危惧され、ファシズムによる圧政の波がすぐそこまで押し寄せて来ている以上、これと闘うことこそが堪え得る体制維持につながり、この意味から作家の責任は明らかであるというのがヘミングウェイの考え方であった²⁷。『デイリー・ワーカー』はこの会議におけるヘミングウェイ参加の意義にとくにふれ、次の様に伝えた。「この作家会議は文字通りの人民戦線であり、アーネスト・ヘミングウェイの様にほとんど政治的訓練のない人間も、ジョセフ・フリーマンのような正直正銘の党员も、共に全面的に協力態勢が出来たのである……。アーチボルド・

マクリシュ、オグデン・ステュワート、ウォルター・デュランティなどがカーネギー・ホールの同じ壇上に登場したことは、アメリカ作家連盟の幸先のよさを示す……ひとつの徴候である。』²⁸ ヘミングウェイが「戦場にあるときよりもっと臆病になった」のは²⁹、これが彼にとって初めての政治的発言であったからである³⁰。

ワルドー・フランクからオグデン・ステュワートへの作家連盟会長交代劇が、利用し得る全ての知識人を動員する戦術を如実に示していることについては既にふれたが、このステュワートの報告にも若干ふれておかねばならない。

知識人一般にみられる共通の欠点は、例えば『アメリカの悲劇』や『大資本』の結末におけるセンチメンタルな処理の仕方であって、ドライサーやドス・パススが偉大な作家たり得ない原因はここにあるというわけである。このセンチメンタルな姿勢が行動への躊躇、更には挫折感の原因となっており、このような無気力からの立直りのためには、知識人が博物館を出て新鮮な空気を吸い、大衆と共に行動することである。そして、「今後私はドライサー氏と同じ問題に直面した場合、これを見事に克服するヒーローのいる『アメリカの喜劇』を一生かかってでも書くつもりである」と言ってドライサーを揶揄した³¹。ドライサーの場合の様に、消極的態度とこれを合理的に処理する技術にたけているインテリ作家は、抽象的意味での社会主義の信奉者であり、現実には快適な資本主義的生活を享受して何の矛盾も感じないでいられるし、政治・経済大衆運動に対して、単に外側からしか観ることが出来ないという短所をもっている。ステュワートによればこの根源はアメリカのリベラル・エデュケーションにあるわけであるが、これもまた、第1回作家会議までのプロレタリア文字運動にみられた反知性主義の系列に入るものである。ハロルドスターンはかつて『アメリカ合衆国の文明』への序文で、「理論と行動の鋭い対立はアメリカの生活におけるほとんど全ての分野にわたっており、左手のやることを右手が理解出来ない程である」と言ったが³²、

スチュワートの場合、これと同じ経験乃至反省に立っての発言であるとも言えるであろう。「長期にわたる……強い幻滅感に始まり、政治的関心の軽べつ」に至る歴史的経過を踏え、「今後は人生の基本的側面に着目し、それについて語る決意である」³³。

民主主義の危機と、その張本人である「野蠻人」の行動に対する知識人の傍観者の態度への強い警告は、カウリーの場合にも共通している。彼は1930年以降の7年間を危機の時代と呼び、これを32年から第1回全米作家会議の前年の34年までのラディカルな文学理論の時代と、35年から36年、つまり第2回全米作家会議までの、マルクス主義批評の妥当性に関する芸術・政治論争の時代のふたつの時期に区分した³⁴。

この区分が適切であるかどうかはもっと詳細に検討してからでないと断定は出来ないが、ヴァン・ウィクス・ブルックスが言っているように、アメリカの伝統は進歩の思想や民主主義思想にあるとする考え方が強調され、新しい文学ナショナリズムの運動が人民戦線の主流を占めたのがこの時期である。「われわれの連盟は、過去に多くの作家の参加を勝ちとった進歩的運動を相続したものである。この運動は失敗したが、われわれの今行っている運動がその轍を踏まないようにするためには、丁度、昔愛国的な建国の父がそうであったように、又、昔の伝導者達がそうであったように、必要なのは決断力である」と言ったのはブルックスであるが³⁵、カウリーが指摘したマルクス主義文学理論の現実的妥当性の問題は、ブルックスの愛国主義的革新運動再興の提唱と同一基盤に立つものである。言うまでもなく、これは革命運動の穏健化現象であって、これを象徴的に表現しているのがケネス・パークの報告内容である。

この報告書は全く政治性を含んでいないと言っていいものである。第1回会議においては共産党から激しい批判を浴びながら、なおかつ「共産党の活力と組織力」に期待し、共産党の指導によって結成されたアメリカ作家連盟は全ての反戦、反ファシズム勢力の結集を可能にするであろうとまで予言し

たが³⁶、この会議での報告に較べて第2回会議での報告では政治的内容は増々稀薄になっている。「文学と科学との関係」と題するこの報告は、両者にみられる類似性について述べたものであり、科学における創造的懷疑や組織的疑念は、古いパターンから新しいパターンへの発展という一種の転化機能をもつ批評精神と同一基盤に立つものである、という思想を展開したものである。

批評機能とは、「修正の枠組を更に拡大する」ことであり³⁵、ナチズム支配下にあつては、言論思想の断圧によってこの「枠組の拡大」が絶望的である、というのがパークの政治的言及と言える部分である。このことは、本来作家というものは、あらゆる政治・社会的組織への忠誠心を放棄すべきであつて、プロバカンダに対しては一定の距離を保った「知的不信感」を持つべきであるし、「至福千年は疑念の中にある」のであつて³⁸、この疑う心こそが社会主義勝利への道であるとするパークの基本的信念からみれば別に不思議なことではないかも知れない。『永遠と流転』(1935)には既にこの思想的展開がみられる。つまり、全面的懷疑の姿勢こそが進歩の原動力であるというわけである。内省や観察を拒む絶対的ドグマ、中道を妥協ととらえ、二者択一的で、排他的全体主義思想も、進歩に枠組を共に与えるものとしてこれを批判したが、その内容は、保守的で伝統的思想擁護者であるアレン・テートをして、「極左批評家の中で、真面目なマルクス主義文学論には不可欠の歴史的、哲学的視野を具えているのはパーク氏だけ」とまで言わしめる程であつた³⁹。

パークの報告が人民戦線における新しい戦術の方向を示すひとつの典型であるとすれば、グランヴィル・ヒックスのこの会議での報告は忠実なる党員の行動の軌跡を描いていると言えるであろう。ヒックスは『ある真実』(1965)の中でモスコウ裁判にふれ、個人的にはロシアに対する信頼感が揺らいだけれども、結局は「ロシアを非難し、共産党と対立することは出来なかった。当時ソ連はファシズムに対する唯一の防波堤であつたし……、と

りわけ共産党は先頭に立って反動勢力と闘っていたのだ。特にその新しい政策やアメリカの革新的伝統、あらゆる反ファシズム勢力との協調などの面で、私には共産党がアメリカにとっての大きな希望の様に思えた。だから、ロシアに何かが起っているからといって、そのロシアを見捨てることは出来なかった、」と述懐している⁴⁰。しかし、現実には、ヒックスの様な忠実な党員が、フリーマンやゴールドなどと共にこの会議のいわば裏方に回され、むしろ著名な同伴者を表面に据えるという方針が明らかになると、作家連盟に対して早速抗議の手紙を送った。「われわれの目的は共産党員そのものを排除することにあつたわけではない。目的はむしろ新しい人々に報告をしてもらうことであつたのだ」、というのがこれに対する返答であつた⁴¹。結果的にはヒックスも報告者の中に含まれることになったが、一般的に言って、リベラル達は「単に憶病のためか、あるいは共産党員に対する誤解」からか、共産党に対して非協力的であり、これらの知識人をも動員して戦線を結成することが党に課せられた重要な使命であり、共産党員の中には、自からの党員としての役割を縮小してまで彼らに媚を売る者まで出る始末であつた⁴²。

ヒックスの報告が特にわれわれの興味をひくのは、1933年の『ニュー・マッセズ』における「アメリカ批評の危機」で提起したマルクス主義批評家にとっての必須条件、つまり、(1)階級闘争への関心、(2)体験の凝縮と集中、(3)プロレタリアートの前衛としての自覚⁴³、といった主張がここでは完全に消えているということである。

ヒックスによると、アメリカ文学とイギリス文学の間にみられる相違点は、アメリカ文学には、作家の理想と現実との大きなギャップに起因する欲求不満が目立つということである。可能性と結果との不一致、それによって生ずる挫折感、これらは必然的に欲求不満をテーマとする「反動的」作品を生む。この挫折感からの脱却のためには積極的な政治参加が必要であり、全人的人間追求の願望があれば、当然切迫した社会・政治情勢に対する自覚が喚起される筈である。確かに、政治に対して超然とした態度をとることによ

って創作活動がより充実したものになる面もあるけれども、このことは危機的状况に直面している場合には当てはまらない。この様な姿勢は国民の反ファシズム闘争における連帯感を損うばかりか、作家の描く理想実現の地盤を根底から崩すことになり、結局は「アメリカへの帰属感」を失わしめる結果につながるからである。

人民戦線思想は既にアメリカ民主主義の伝統の中で確固とした基盤を持ち、「文学における主題は勿論、全ての政治的問題においても、必ずしも同意を必要とするものではない。私の場合も、究極的社会改革に関するあなたの考え方に疑念を持つようなことはしないし、あなたの方でも私の考え方に対する態度は同じであろう。例えば、ジェイムズ・ジョイス、T. S. エリオット、マルクスなどに関して、同じ考え方を持つ必要はないのである。」

必要なことは、「反戦・反ファシズム闘争で一致団結することである。」⁴⁴しかしこの発言は、ヒックスが共産主義の勝利への自信に動揺をきたしたためではなく、プロレタリア文学のもう1人の代弁者マイケル・ゴールドと同じく、革命文学の1時的休戦宣言であると考えてるのが妥当である⁴⁵。彼は同志達に対して、「リベラル派知識人の優柔不断な態度を改めさせるには、われわれが共通の正義に対して如何に献身的であるかを示してやる必要がある。彼らがわれわれを怖れる気持は、われわれが彼らを怖れる以上であり、」これら知識人の信頼を得る唯一の道は、胸襟を開くことであると訴えた⁴⁶。

ヒックスが共産主義の勝利を確信していたことは、ジョン・リード・クラブの創設者の1人であるホレース・グレゴリー編、『アメリカの新しい文学』に対する書評にも明らかである。この本に集録されている作品の大部分は、資本主義に代る新しい集団主義を主張しておりながら、基本的には、古い絶望感、挫折感がその底に流れている、というのがヒックスの批判であった。これは、「共産主義文学は共産主義の希望を反影するものでなければならない」という主張と、文学には党の方針や独善が支配的であってはなら

ないとする考え方に一致するものである。若し党が提供出来るものがあるとすれば、それは将来に対する希望である。この種の樂觀論は、「共産主義は福音である」という表現をとって現われるが、彼が若い作家達に期待したものは、いわば「共産主義の希望の実質化」であったのである⁴⁷。

しかし、理念と実践的行動にはある程度のずれが生ずるのは止むを得ない。知識人の集会における党の目立った行動を警めながら、実際には、「党はその支配力を放棄すべきであるとする提案が行われたとすれば、恐らく他の者達と同じようにショックを受けたであろう。」⁴⁸

(4)

「連合戦線は意見の相違を抹殺したり、批判を抑圧したりするものではない。文学であれ、政治であれ、誰にも自己の立場を表明する自由があるし、又そうでなければならない。どうしても守らなければならないものとすれば、立場の相違に気をとられて、われわれの決断した目的を逐行するに当って、如何なる形にせよ、これを阻害するようなことがあってはならないということである⁴⁹。ヒックスにとって、人民戦線を阻害する行動をとっている集団はいわゆるトロツキスト派知識人であり、具体的には、ジェイムス T. ファレル、フィリップ・ラーヴ、ウィリアム・フィリップス、ドワイト・マクドナルド、メアリー・マカシーたちであった。

作家会議3日目に各部門別会議が開かれたが、ヒックスが司会する批評部門において、作家連盟の路線及び議事運営をめぐる大きな混乱が起った⁵⁰。ヘンリー・ハートの記録によると、6人のトロツキストが議事運営を妨害し、そのため実質的な討論は全く行われなかったことになっている。しかし、ヒックスの記憶によると妨害者の数は5人で、トロツキストを自称するドワイト・マクドナルド、『パーティザン・レビュー』編集者のフィリップ・ラーヴ、ウィリアム・フィリップス、『ニュー・マッセズ』文学部門編集者のフレッド・ドビー、反スターリニストのメアリー・マカシーの名前があ

がっている⁵¹。6人とするハートの記録はファレルの日記にある数と一致するが、後者があげているのは、マクドナルド、ラーヴ、フィリップス、マカシーの他に、エリナ・クラークとハーリー・ソスレンコである。ファレルによるとこの実行行動は1937年5月末の反スターリン派の秘密会議によって計画されたものであり、上記ラーヴ、フィリップス、マカシー、エリナ・クラークの他に、マーガレット・マーシャル、ブルーノ・フィッシャー、およびハーバート・ソローが加った。ファレルはこのいずれにも参加していないが、特に実行行動への不参加決断の理由としてあげているのは次の二つである。一つは、作家会議への入場券が既に売り切れており、これを手に入れるために、対立しているスターリニスト達に頭を下げる事が自分の思想と矛盾すること、もう一つは、これらスターリニスト達に作家としての資質を疑わしめるような人物が含まれていたことである⁵²。

何れにしても、この策動によって如何に議事進行が妨げられたかは、ジョセフ・フリーマンの「批評について一言意見を述べてもよいか」という質問に対する司会者ヒックスの、「いや、だめだ。ここはそういうことが議論出来る場ではなくなってしまった」という答が端的に示す通りである⁵³。ここでは文学理論に関する論争はほとんどなく、結果的には、もっぱらトロツキー裁判に対する作家連盟の対応をめぐるの、スターリン派及びトロツキスト派の激しい応酬に終始したようである。マクドナルドはこの当時を回顧して、「リベラルからラディカル、消極的ながら共産党シンパから積極的反スターリニストへの転向の速さには、われながら今さらのように驚いている」と書いている⁵⁴。かつてはプロレタリア文学の旗手であり、ジョン・リード・クラブの機関誌『パーティザン・レビュー』の創始者であったラーヴとフィリップスが、反スターリニストとして自からの立場を明確にしたのはこの作家会議の時が初めてであり、これを契機として反共の「新しい文学的拠点」を作りあげることになったのである⁵⁵。この部門会議の激しいやりとりは、ヒックスの次の様な回顧によってしか知ることが出来ないのは残念であ

る。

「日曜日の午前中は騒々しく、もっぱら非難攻撃とそれに対する反駁が繰り返され、議事の進行が不可能となった。……反対派の中にも正当だと思われる主張のあることは承知していたが、彼らは破壊分子、議事妨害者、厄介者であり、反ファシズム闘争を推し進めている私には、その進路を塞ぐ障害物であった。」⁵⁶

これらのいわゆるトロツキスト派知識人は従来から『ネイション』誌への積極的寄稿者であり、編集者責任者のジョセフ・ウッド・クルーチの「反共思想」を考えれば、彼らの変節ぶりは当然の成り行きとみることも出来るが、ラーヴのとった急激な反党行動は、ヒックスにとってもかなりの衝撃であったようである。「ラーヴの共産党攻撃は、全米作家会議前は慎重そのものであった。反共宣伝が公然化したのは会議以後であるが、それはオストロヴスキーの『英雄の誕生』評が最初である」というのがヒックスの見方であるが⁵⁷、実際問題として、ラーヴ及びフィリップスの『パーティザン・レビュー』の複刊はこの会議直後であった。1938年2月の『パーティザン・レビュー』に載ったラーヴの論文は、いわば共産党との訣別を表明したものであるが、そのタイトルは「進歩の2年」というのはなほだ皮肉な題名であった。この中で彼は人民戦線にふれ、「わずか2年という短期間のうちに、1935年の革命家達は、新唯物主義の赤旗をニューディール・マルクス主義のアメリカ国旗に変えてしまった」と非難し、これを政治的には反動、文学的には不毛の思想として激しく攻撃した。そして反ファシズム闘争とこれを規定し、1935年当時の革命文学運動に立ち還るべきであると強調した。しかし、作家連盟が行ったスペイン戦争に関する知識人へのアンケート調査で明らかなように、積極的共和国支持者の数が回答者414人中409人にも達する現実の中にあって、これら人民戦線批判の知識人の数は少数であった。ラーヴやフィリップスにとって、プロレタリア文学運動破綻の原因は人民戦線派の反知性主義であり、これによって政治的ラディカリズムが不可能になったと考えた

のである。アメリカの地方主義の伝統は、ヨーロッパ文学思想の移入による文学ラディカリズムへの可能性を閉すものであり、一種の党派性による反動的傾向を強めるものであると断定したのである。そして、さらに、「プロレタリア文学は一階級の文学を装いながら、実は一政党の文学なのである」とまで言い切ったのである⁵⁸。

しかし、この種の知識人の人民戦線派からの離脱は、誰の場合も急激に起きたことではなく、ある者にはかなりの躊躇がみられたのは勿論である。例えば、メアリー・マカシーはソートン・ワイルダーの『わが町』を優れた作品であると感じながら、「お金のために節をまげていると思われるのが怖ろしくて、それを雑誌に書く気になれなかった」と回想しているが、この種のピュリタニズムは、「自分生来の観賞眼や本能の否定に基づく欺瞞的傾向」ですらあったのである⁵⁹。従って、いわゆるトロツキスト派の中には、このように欺瞞的態度に堪え難くなった結果として反共的行動をとるに至った面もあったということが出来るであろう。

第1回全米作家会議に較べて、第2回全米作家会議では社会主義実現への現実的取組みの方針がより明確になったと言えるであろう。口では革命を唱えながら、現実には人民戦線路線を攻撃し、結果的には社会主義社会の実現を阻害しているのがトロツキスト達であり、彼らのファシズムの恐威に対する現実認識は基本的に甘い。人民戦線の目的は今直ちに社会主義国家を実現しようとするものではなく、統一と団結によって、先ずその条件を創出することである。これがフリーマンの考え方であった⁶⁰。団結を乱す内部の敵は、結局は資本主義社会の存続を可能にするのみか、これを積極的に推進すらしているのだというわけである。

既に述べたように、この会議を界にして、いわゆるスターリン派とトロツキスト派知識人の亀裂は決定的となり、作家会議の基盤も完全に揺らぎ始めることになった⁶¹。

注

- 1 アメリカ作家連盟が推せんした各部門の優秀作品は次の通りである。
 小説——John Dos Passos, *The Big Money*
 詩——Carl Sandburg, *The People, Yes*
 劇——John Howard Lawson, *Marching Song*
 伝記——Joseph Freeman, *An American Testament*
 評論——Van Wyck Brooks, *The Flowering of New England*
- 2 Edmund Wilson, *Letters on Literature and Politics 1912–1972* (Rotledge & Kegan Paul, 1977) p. 278.
- 3 Philip Rahv, "Reply," *NM* (March 30, 1937).
- 4 Granville Hicks, "The Mood and Tenses of John Dos Passos," *NM* (April 26, 1938).
- 5 Mike Gold, "Migratory Intellectuals," *NM* (December 15, 1936).
- 6 Earl Browder, "The Writer and Politics," *The Writer in a Changing World*, ed. Henry Hart (Equinox Cooperative Press, 1937) pp. 48–55.
- 7 例えば Murray Kempton の *Part of Our Time* に関して Jack Conroy は、「心を改めたカゲロウたちの「告白」は、大体において頭の手で書かれたものか、もしくは、ファレルのような手のほどこしょうのない策士にときどきみられる、間違っているか、あるいは偏向した記憶にもとづいて書かれたものである」と批判し、この種の回顧録は信用性に乏しいものであると警告している。cf. "The Contemporary Fact," *The Jack Conroy Reader* ed. Jack Salzman and David Ray (Burt Franklin & Co., 1979) pp. 131–134.
- 8 Alan Calmer, "Portrait of the Artist as a Proletarian," *Saturday Review of Literature*, July 31, 1937.
- 9 この辺の事情に関しては James Burkhart Gilbert, *Writers and Partisan, A History of Literary Radicalism in America* (John Wiley and Sons, Inc., 1968) に詳しい。
- 10 Joseph Freeman, "Toward the Forties," *The Writer in a Changing World*, op. cit., p. 9
- 11 *NR* (February 17, 1937) 無署名。
- 12 1937年5月14日の Edmund Wilson 宛の手紙。cf. *Writers and Partisan*, op. cit., p. 157. 尚1938年5月の "The Moscow Trials: A Statement by American Progressives" における裁判の正当性を訴える声明の署名者は次の通りである。

- Mark Blitzstein, Morris Carnovsky, Harold Churman, Jack Conroy, Malcom Cowley, John Garfield, Dashiell Hammet, Lillian Hellman, Langston Hughes, Dorothy Parker, Henry Roth, Irwin show (*NM*, May, 1938).
- 13 Mathew Josephson, *Infidel in the Temple* (Alfred A Knopf, 1967) p. 434.
- 14 Earl Browder, *The People's Front* (The Vanguard Press, 1938) pp. 33, 32, 25.
- 15 *NM*, June 22, 1937 掲載の原題は “The Threat of Frustration” であったが *The Writer in a Changing World* では “The American Writer Faces the Future” となっている。Hemingway の “Fascism Is a Lie” も “The Writer and War” になっている。
- 16 “What Is Americanism?” *Partisan Review and Anvil* (April, 1936)。ラーブとフィリップスの意図は、マルクス主義がアメリカの革命的伝統の直系であることを裏づけることにより、「共産主義者こそ真のアメリカ人」というブローダーの主張を打破ことにあった。しかし、1年後の1937年にはこの2人が、共産主義とアメリカの伝統とは無関係との結論に達したことはまことに皮肉である。
- 17 *The Writer in a Changing World*, op. cit., pp. 40—41.
- 18 *ibid.*, p. 46.
- 19 Archibald Macleish, “Spain And American Writers,” *ibid.*, p. 56. なお *NM*, June, 1937 では “The War Is Ours” となっている。
- 20 John Chamberlain, “Was It A Congress of American Writers?,” *Common Sense* (July, 1937).
- 21 Alfred Bingham, “War Mongering on the Left: III. Spain and American Progressivism,” *New York Times* (August 6, 1936).
- 22 cf. Archibald MacLeish, “The Irresponsibles,” *Nation* (May 18, 1940), “Postwar Writers and Prewar Readers,” *NR* (June 10, 1940), “The Tradition of the People,” *NM* (May 17, 1938), *A Time to Speak* (Houghton Mifflin Company, 1940) pp. 81—96. アメリカ作家連盟によるスペイン戦争に関する作家へのアンケート (*Writers Take Sides, Letters about the War in Spain from 418 American Authors*, The League of American Writers, May, 1938) によると、回答者 418 名中、中立 (7 名)、親フランコ (1 名) を除く 409 名は反フランコ、反ファシズムの立場を表明した。中立の回答者には、白紙の E. E. カミングスや、「私は何れかの側を制するような行動は、たとえ指一本たりとも動かしたくない」とするロビンソン・ジェファーズも含まれている。1936年9月アメリカ作家連盟は、スペインに関するアメリカジャーナリズムの偏向性を批判する声明を発表したが、署名者は以下の通りである。Nathan Asch, Michael Gold, M. J. Benardete,

- Granville Hicks, Bruce Bliven, Corliss Lamont, Kenneth Burke, Max Lerner, Robert Cantwell, Jerre Mangione, Eleanor Clark, T. S. Mathews, Malcolm Cowley, Isidor Schneider, Otis Ferguson, Herman Simpson, Waldo Frank, George Soule, Joseph Freeman, Harvey C. Webster ("In Defence of a Free Spain," *NM*, September 8, 1936)
- 23 Carlos Baker, *Ernest Hemingway, A Life Story* (Scribner, 1969).
- 24 Dos Passos, "A Farewell to Europe," *Common Sense* (July, 1937).
- 25 John Dewey to Dos Passos, June 12, 1937 in John P. Diggins, *Up from Communism: Conservative ODYSSEYS in American Intellectual History* (Harper & Row, Publishers, 1975) p. 86.
- 26 *Up from Communism*, *ibid.*, pp. 88—89.
- 27 Cf. Ernest Hemingway, "The Writer and War," *The Writer in a Changing World*, *op. cit.*, pp. 69—73.
- 28 Edwin Seaver, "Writers Lead Defense of American Culture," *Daily Worker* June 9, 1937.
- 29 Granville Hicks, *Part of the Truth* (Harcourt, Brace & World, Inc., 1965) p. 147..
- 30 *The Writer in a Changing World*, *op. cit.*, p. 208.
- 31 Donald Ogden Stewart, "Horrible Example," *The Writer in a Changing World*, *on. cit.*, p. 125.
- 32 Harold Stearn ed., *Civilization in the United States* (Greenwood, 1971, reprint of 1922 edition).
- 33 Donald Ogden Stewart, *op. cit.*, p. 12.
- 34 Cf. Malcolm Cowley, "The Seven Years of Crisis," *The Writer in a Changing World*, *op. cit.*, pp. 44—77.
- 35 Van Wyck Brooks, "The League of American Writers," *NR* (February 22, 1937)
- 36 *Nation* (May 15, 1935)
- 37 Kenneth Burke, "The Relation Between Literature and Science," *The Writer in a Changing World*, *op. cit.*, p. 171.
- 38 Kenneth Burke, "Boring Within," *NR* (February 4, 1931).
- 39 Allen Tate, "Mr. Burke and the Historical Environment," *The Southern Review* (1936—1937).
- 40 Granville Hickss, *Part of the Truth*, *op. cit.*, p. 145.

- 41 Daniel Aaron, *Writers on the Left* (Avon Books, 1969) p. 372.
- 42 Granville Hicks, "The American Writer Faces the Future," op. cit., p. 189.
- 43 Granville Hicks, "The Crisis in American Criticism" *NM* (February, 1933). もっともここにみられる教条主義的批評原理は、同年9月出版の *The Great Tradition* にもみられるものであつて、1935年の改訂版では、この論文はあまりにも「機械的」であるとして自からを批評している。
- 44 Granville Hicks, "The American Writer Faces the Future," op. cit., p. 188.
- 45 Michael Gold, "Notes on the Cultural Front," *NM* (December 7, 1937) ゴールドはこの論文で人民戦線からの脱落組を激しく攻撃した。これは主として、いわけるトロツキスト派知識人を対象にしたものであるが、プロレタリア文学運動は死滅したのでもなければ、才能を欠いているわけでもない。新しい運動の準備期間に入ったのだと主張した。
- 46 Granville Hicks, "The American Writer Faces the Future," op. cit., p. 189.
- 47 Granville Hicks, "Communism and the American Intellectuals," *NM* (September 28, 1937).
- 48 Granville Hicks, *Where We Came Out* (The Viking Press, 1954) p. 45.
- 49 Granville Hicks, "The Writer Faces the Future," op. cit., p. 189.
- 50 部門及びその司会者は次の通りである。

| | |
|---------------------|----------------------|
| 小説——Leane Zugsmith, | 批評——Granville Hicks, |
| 詩——Horace Gregory, | 劇——Albert Malts. |
- 51 Granville Hicks, *Part of the Truth*, op. cit., p. 148.
- 52 Alan M. Ward, *James T. Farrell: The Revolutionary Socialist Years* (The Gotham Library, 1978) p. 73 "Notes" 48—50 (p. 159)
- 53 Henry Hart, *The Writer in a Changing World*, op. cit., p. 225.
- 54 Dwight Macdonald, *Politics Past* (The Viking Press, 1970) p. 11.
- 55 James Burkhart Gilbert, *Writers and Partisans* (John Willy & Sons, Inc., 1968) p. 178.
- 56 Granville Hicks, *Part of the Truth*, op. cit., p. 148.
- 57 Granville Hicks, "A 'Nation' Divided," *NM*, (December 7, 1973).
- 58 Philip Rahv' "Two Years Progress—From Waldo Frank to Donald Ogden Stewart," *PR* (February, 1938).
- 59 Cf. Mary McCarthy, *Sights and Spectacles, 1937—1958* (Heinemann, 1959) pp. XVI—XVII.
- 60 Cf. Henry Hart, *The Writer in a Changing World*, op. cit., pp. 195—256. フリ

ーマンが第1回全米作家会議においてバーグが主張した「人民文学」には反対の立場を表明していたことは、この第2回会議における彼の発言と比較して興味深い。

61 第2回全米作家会議における大会決議事項は以下の通りである。

1. WPA 作家計画の継続及び発展。各種団体の協力。
2. 連邦芸術局の設定及び立法化支持。
3. Frazier—Lundeen 法案（専門の文化労働者に対する社会保証）の証認と支持。
4. 全ゆる検閲制度反対。
5. 全ての政治犯の釈放（Tom Mooney 及び Scottsboro Boys を含む）。
6. Republic Steel Corporation に対する警察権力の介入糾弾及びその家族への救援活動。
7. 人種差別反対。
8. 特にラテン・アメリカ諸国における反ファシスト運動援助。
9. 反日抗戦中国作家の釈放。
10. 全ての反動的教科書の廃棄処分。
11. 地方図書館における経済的、政治的理由による作家に対する図書貸出し制限の撤廃。
12. 現行ブック・クラブにおける討論選択のためのフォーラムの設置。
13. 地方民芸促進団体発足支援。
14. 教員組合地方支部加入を理由とするモンタナ大学図書館員資格剥奪反対の抗議行動の継続。
15. アメリカ作家連盟全会員の労働組合加入。
16. CIO との連携強化。
17. メキシコ作家との協力。
18. 国際作家会議（1937年7月、於マドリッド）への連盟代表としてマルカム・カウリーを派遣する。
19. スペイン人民戦線への積極的支援。
20. スペイン民主々義擁護全米作家委員会の設置。
21. バスク地方難民子女最低500人のアメリカ移住促進。

なお、新しく選出された連盟の各委員は次の通りである。

会 長 Donald Ogden Stewart

副会長（地方支部長を兼ねる） Van Wyck Brooks, Erskin Caldwell, Malcolm Cowley, Langston Hughes, Paul de Kruit, Meridel LeSueur, Upton Sinclair

書 記 Philip Stevenson

執行委員 Dorothy Brewster, Kyle Crichton, George Dangerfield, Majorie Fischer, Joseph Freeman, Robert Gessner, Henry Hart, Rolfe Humphries, John Howard Lawson, Dexter Masters, W. L. River, Genevieve Taggard, Jean Starr Untermeyer

Synopsis

The American "Literary War" in the 1930s (IV)

—The Second American Writers' Congress—

Hideo Higuchi

It was a symbolic event in the imminent failure of the People's Front strategy in the United States that the Second American Writers' Congress picked out Dos Passos's *The Big Money* as the best novel for 1936, although the writer makes it clear toward the end of the novel that he has no confidence in the Communist Party. The tactics of the Front was to attract the sympathy of the liberal intellectuals and to make use of the celebrities to the Party's advantage. This kind of manoeuver appeared to be effective at first in organizing a greater Front, but in reality, it led to the inner conflict among the progressives, culminating in the breakup of the Front into two groups: Stalinists and anti-Stalinists.

The disruption of the monolithic organization of the progressive intellectuals so far began to be apparent on the third day of the Congress, when a handful of anti-Stalinists broke into the session for the section of criticism chaired by Granville Hicks and the conference was driven into entire confusion. Among the intruders were Philip Rahv and William Phillips who had been active in the proletarian writers' movement. They declared at the Second Congress that they were so disappointed at the current policy of the League of American Writers

that they were going to publish a new *Partisan Review*. Their opinion was that the League, which organized the Second Congress, wrongly took literary radicalism to be in the same tradition as liberal politics and the literary tradition apparent in the United States.

Newton Arvin's presentation at the Congress on the democratic tradition was one of the representative positions of the League in that he was emphatic in his assertion that the revolutionary tradition had been developed in the literary soil of America since its inception. Democracy and revolutionary ideas were thought to be an inseparable entity.

This change of policy of the League was so abrupt for some of the members that they broke away from the League and established their own independent literary movement. This was the foretaste of the bitter experience of the failure of the People's Front strategy culminating in 1939.